

農協の飛ばし先だった経営破綻した安愚楽牧場

今朝の日本経済新聞が、この8月に経営破綻した安愚楽牧場(本社・栃木県那須塩原市)の話題を取り上げています。畜産の話ですが、本コラムが一度は取り上げてみたかった話題です。いくつかポイントがあります。一つは、昨年4月に起きた宮崎県での口蹄疫感染の初発となったことが、今年1月、宮崎県口蹄疫対策検証委員会報告書で明らかにされたことです。筆者は、何をいまさらという思いがあります。というのは、当時、2チャンネル情報で感染源は、川南町の安愚楽牧場・児湯牧場という噂が流れていて、安愚楽牧場のずさんな飼育管理なら、あながち嘘ではないなと思っていたからです。当時の宮崎県幹部は、その時点で安愚楽牧場を感染源とすると、同牧場の経営に重大な影響があると判断、あえて感染源の特定をせず口蹄疫対策を進めたようです。これを裏付けるのが宮崎県の検証委の報告で、ほぼ同じことを指摘しております。もう一つ、農協との絡みです。畜産地帯の農協が負債農家の「飛ばし」に安愚楽牧場を上手に利用していたことです。ある情報筋は、飼料の販売先である畜産農家の資金繰りに行き詰まると、農協は貸付金も返ってこなくなるので、農協が資金繰り怪しい畜産農家をピックアップして安愚楽牧場に紹介していたと指摘しておりました。農協としては、安愚楽牧場が多少怪しかろうと、経営が回っている間は安定収入があるので、返済資金が返してもらえらという打算があったようですね。それを裏付けるのが、今月5日付け読売新聞の、この記事。「安愚楽牧場預託農家、餌代止まり牛売れず…地獄」。

「20代でサラリーマンをやめて父親の跡を継ぎ、乳牛のホルスタインの雄を肉牛として売る事業に乗り出した。600頭以上育て、バブル期には年間2億5000万円を売り上げたが、牛肉の輸入自由化で低価格牛の相場が暴落、1億数千万円の借金を作った。牛をすべて売り、20ヘクタールの土地を処分したが、6000万円の借金が残った。途方に暮れていたところに、農協から舞い込んだのが安愚楽牧場の預託の話だった。『牛舎は空。餌代や光熱給水費も安愚楽が面倒をみってくれる』。家族を代表にして1999年頃に安愚楽と契約した。預託料は牛1頭当たり1日480円で、100頭いれば1日4万8000円の収入になった。しかし、今年7月から支払いが止まり、安愚楽牧場の経営破綻が表面化。支払いはその後再開したが、未払いの約280万円は今も回収できていない。『支払いが止まったら、借金が再び増えてしまう』。男性は肩を落とす。」

今年 9 月 5 日付け北海道・十勝毎日新聞が、「JA北海道中央会(飛田稔章会長)が、『安愚楽牧場』(本社栃木県)が東京地裁に民事再生法の適用を申請した問題で道内預託農家や各JAの委任を受けて、安愚楽側との交渉窓口を担うことにした」と報じておりました。それだけ「飛ばし」が多かったということでしょうか。口蹄疫問題でもそうですが、新聞を読んでいる限りでは、こういう脈絡がつかむことができません。読者の立場になってもっと真実を突いて欲しいと思います。

それはそれとして「質問・疑問に答えるQ&AサイトOKWave」でこんなことを書いております。質問は、「安愚楽共済牧場の投資利回りが良いそうですが。」。少々、長目ですが、答えを全文紹介しておきます。

最近雑誌で同じような牛のオーナー制度を見ました。株式会社なの花畑という会社でした。私も興味があり問い合わせをしてみました。あぐら牧場もなの花畑もやっている内容は同じような内容でした、違うところは、あぐら牧場は、黒毛和牛。なの花畑は、ホルスタイン。事業内容を見たらお互いになるほどと思いました。もし興味があるのであれば、私が問い合わせした URL を教えます参考してみてください。

URL <http://www.nanohanabatake.co.jp/>

もう一点、一度直営牧場へ赴き、自身の目であぐらの牛を見る事を勧めます。対外用に整備した那須の牧場ではなく、ろくに看板も上げずひっそりやっている各地の牧場を見て下さい。おそらく見学を断られますので、防護服や長靴等を用意し数日前に連絡し強引に行くのが良いでしょう。あまり早く連絡を入れると、その牧場だけきれいにするかもしれません。まともに管理されていたのは10年前くらいまででしょうか、今のあぐらはオーナーからの資金集めが主体となり、本来の良質な牛の生産を怠っています。生産現場はHPの美辞麗句が詐欺だと思えるほどの有様です。

私は畜産業(酪農)を経営しております。地元直営牧場もあり、仲間預託農家の者もいます。今までは、問題山積みでも損をするのは投資者の責任だと考えておりましたが、その事が今回の危機を招いたと反省しております。さて、あぐら牧場ですが、HPの美辞麗句はJAROに訴えられるくらいに、「ウソ・大げさ・紛らわしい」事ばかりで、関連業者(農家に関らず)が見るとぶっ飛ばすか大笑いの内容です。本来、農業特に畜産業はそれ程利益率の良い産業ではありません。この10年を見ても異業種から農業へ参入し失敗した例が殆どで、数少ない成功例はJAや既存農家との協力の下成果を挙げているものです。(7 & iなどが代表例です。)未だに勘違いしている人が多いのですが、工業の効率生産や大資

本を導入すれば日本農業も効率生産が可能だという理論は、この10年で見てまったく成立ってなく。一度撤退した企業も二度と足を踏み入れてはいません。あぐらもただ飼養頭数が多いだけで、うたっているようなスケールメリットを生かした生産体系も無く、資材調達も一般農家に比較し安価な調達もできていません。ましてあぐらの生産物は実際に市場でも低評価の物が大半です。にも拘らずそれなりの配当を行えているのは、集めた資金を他で運用している疑念さえ沸いてきます。畜産事業収益が十分に上げられずに、それでも預託資金を集めて他で運用しているのなら、預託法違反の可能性もあります。低レベルの肉生産では、和牛農家の脅威にもなりませんし実際に相場に影響を与えたことはありません。本来一貫生産をうたい、自家生産にこだわっている筈が、素牛を市場で大量に購入している事でも有名です。この時ばかりは市場価格が乱高下するため和牛農家にとっては迷惑な存在です。よく衰退する日本農業を支えているような表現がとられますが、実際には存在価値など無く、今の低レベルの肉は交雑種などで十分に補う事ができます。また業界では、伝染病の巣窟と言う表現がとられるほど病気が多く、今回の口蹄疫騒動でも「やっぱりあぐらか」「いつかやと思っていた」と表現されるほどです。発生はともかく、感染拡大の主因となったのは業界では常識で、調査委員会でもその点を重点に調査されています。にも拘らず、未だにHPでは発生を伏せ、規制区域内として処分したとの表現がとられ、オーナーにすら発生の報告がなされていません。まだまだ問題点はありますが、畜産生産が順調でなくとも預託金が集まれば存続してしまうシステムゆえ、他の生産者にとっては防疫等、非常に危機感を持たざるを得ない会社です。これまでの指摘点は、畜産関係業者などで簡単に確認が取れます。あぐらの宣伝文句に踊らされず、人伝にでも情報を確認される事を望みます。今現在、資金難のため預託農家への預託料支払いを遅延しており、従業員へのボーナスカットも何の説明も無く実行されています。

この「質問・疑問に答える Q&A サイト OKWave」の記事、いつのことか分かりますか。昨年10月11日のことでした。1年以上も前に、このような記事がネットに出ていたのです。

福島原発事故もそうですが、メディアの不甲斐なさが目立った1年でした。今朝取り上げた日本経済新聞の記事も、どこか隔靴搔痒の感があるような気がしてなりません。新聞は、もっともっと批判精神を持って欲しいものです。

◇◇◇本日のニュース◇◇◇

安愚楽牧場のからくり 資金不足、新規契約で穴埋め 事業計画立案も融資交渉失敗

9日に破産手続きを開始した安愚楽牧場(栃木県那須塩原市)が、和牛オーナー契約収入のほとんどを、契約者への配当や解約金の支払いに充て、事業資金が慢性的に不足していたことが同社の資産内容を調査した監査法人の報告や元経営幹部の証言で明らかになったと日本経済新聞。同社は2009年以降に農林中央金庫などJAバンクグループや銀行から融資を受けようと、食品加工で稼ぐ総合畜産会社化を目指す事業計画を立案したものの、融資交渉は失敗。不足資金をオーナー契約の拡大で埋め、経営破綻を先延ばししていたようだ。ある元経営幹部は「減配や無配にすれば解約ラッシュが起きて、事業の継続はたちまち困難になる。事業を縮小均衡させて立て直すことは資金不足で選択できなかった」と語った。

カメムシ 豪雪の前触れ？

読売新聞秋田版が、触ると言いようのないくさい臭いを発するカメムシが、夏から秋にかけて県内全域で大量に発生したと好レポート。秋田県内では「アネコムシ(カメムシ)が多い年の冬は大雪になる」という言い伝えがある。昨年も県内で大量発生し、その冬、記録的な豪雪に見舞われた。「この冬も大雪になるのでは」と心配する声が聞かれる。県病害虫防除所によると、この暑さで県内全域にカメムシが大量発生。特に茶色っぽいクサギカメムシが屋内に侵入するケースが相次ぎ、強烈な臭いで住民らを悩ませた。

販売額、3年続け過去最高 北海道・新おたる農協仁木町トマト生産組合

北海道一のミニトマト生産量を誇る新おたる農協仁木町トマト生産組合(西條純一組合長、79戸)で、2011年販売額が前年比6%増の14億600万円となり、3年連続で過去最高を記録したと北海道新聞。今年の作付面積は昨年より1.7ヘクタール多い37.3ヘクタールで、収穫量は16%増の1718トンだった。昨年は単価が「異常とも言えるほど高かった」(同農協)ため、今年は価格が落ち着くと予想。当初の販売目標は11億円に設定した。春先の雪解け遅れや濃霧などの天候不順に悩まされながらも、出荷するトマトを厳選し、品質保持に努めた。

須高農協の男性職員が112万円着服（長野県）

各地で農協職員による不祥事の記事が2本ほどありました。長野・須高農協で肥料の配達を担当する50代の男性職員が、肥料の売上金を着服していたことがわかった。112万4000円を着服していたという。JAかごしま中央（鹿児島市）の本部勤務の渉外担当だった男性職員（29）が、顧客の印鑑を不正に使うなどして計約1272万円を着服していたことが9日、分かった。同JAは9月26日付で職員を懲戒解雇。被害金約677万円が返済されておらず、同JAは刑事告訴する方針。

本格的除染 来年3月末にずれこむ

NHKによると、環境省が、放射線量が高い福島県の警戒区域と計画的避難区域の除染について、道路や水道といったインフラの設備については来年1月末から始めるものの、住宅や農地などの本格的な除染は、3月末からにずれこむという見通し。環境省は、住宅や農地は避難している住民などの許可を得るのに時間がかかるうえ、除染で出た土などの仮置き場の確保が難航していることを挙げている。

汚染疑い堆肥、保管ほぼ満杯 島根・JA雲南

島根・JA雲南（雲南市）の肉牛肥育施設で放射性セシウムを含む堆肥が見つかった問題で、島根県は、セシウムが検出された堆肥を袋詰めにして保管することを決めたと中国新聞。一時的な保管場所を確保するのが目的だが、最終処分方法は依然として決まっていない。雲南市と飯南、奥出雲町の肥育センターなど4施設で、処分されていない約570トンが対象。国の放射性セシウムの暫定基準値（1キロ当たり400ベクレル）を上回るか、その可能性がある。